

人生という“みち”の途中で 目が見えなくなっていく。

はっきりと見えていた“みち”が だんだんと朧げになっていく。

人生のある日 突然目が見えなくなったら、みなさんはどうしますか

自身の身体感覚を抛り所に

「知覚」という手法を使うことで、

“みち”がはっきりとひらく。



コトバの葉と共に、

おのづまに愁へなくー

みちひらき

- 中途視覚障害者のための暮らし場の提案 -

0 中途視覚障害

0-1 中途視覚障害者と社会の現状

平成28年の視覚障害者数（身体障害者手帳所持）は、31万2千人である。
 しかし、潜在的な人数は164万人とはるかに上回る想定がされている。
 その90%以上が「中途視覚障害」であり「弱視」である。



—平成28年の厚生労働省のデータ、日本眼科医会の調査より

0-2 弱視者の空間把握の仕方

全体的にぼんやりと白くモヤがかかり、光（照明）と色の区別ができる程度に見える。音声に頼って生活する。

【空間把握の方法】：音声や手足から得る情報が多い。

- ・光 - 照明の設置方向
- ・音 - 大小、方向、反響
- ・質感 - 床材、壁材
- ・におい etc...

0-3 中途視覚障害者の声

- “見えなくても生き生きと暮らしている人もいます”
- “スマホも実は使えるんです”
- “中途失明による精神的不安が大きかったな”
- “バリアフリー住宅が意外と障害になるときもある”
- “外国ってバリアフリーの概念無いんですよ”
- “どどん出来なくなって悔しかったなあ”

4名の中途視覚障害者へのヒアリング調査より

0-4 支援に求められること

視覚障害者のニーズ
 暮らしを維持しながら日中は外で活動したい に対応、
 “障害のある生活を受容できる”ように寄り添う体制と管理が必要である。

1 提案概要 “中途視覚障害者が暮らすには、”

1-1 コンセプトダイアグラム

働く世帯にとって、中途失明は「働けるのか、生活できるのか」という精神的不安要素が深刻である。特に初めは、視覚障害に対する知識不足などから外に出るのが怖い、リハビリに足が踏まないといった人が多い。



1-2 コンセプト

身体法に加え、動いた際の知覚を取り入れ、「居住・支援・就労・活動」がまろみで完結できるような単にユニバーサルなスムーズさではなく、人それぞれのラフなケア空間が確立された暮らし場。



2 全体計画 “みちひろく暮らし場”

2-1 支援施設に対して付加させる機能

既存の支援施設に加えて、「就労・視覚障害者のためのすまい・活動（障害者も含む）」を付加させる。

